

## Yale University Library Digital Collections

|                               |                                                                                                                                                                                                                                                 |
|-------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>Title</b>                  | Joshi Seinenkai, v. 9, no. 2 (February, 1912), Young Women of Japan                                                                                                                                                                             |
| <b>Call Number</b>            | ZP Y88                                                                                                                                                                                                                                          |
| <b>Creator</b>                | National Committee o f Young Women's Christian Associations o f Japan                                                                                                                                                                           |
| <b>Published/Created Date</b> | 1912                                                                                                                                                                                                                                            |
| <b>Rights</b>                 | The use of this image may be subject to the copyright law of the United States (Title 17, United States Code) or to site license or other rights management terms and conditions.<br>The person using the image is liable for any infringement. |
| <b>Extent of Digitization</b> | Unspecified                                                                                                                                                                                                                                     |
| <b>Generated</b>              | 2023-12-26 04:46:13 UTC                                                                                                                                                                                                                         |
| <b>Terms of Use</b>           | <a href="https://guides.library.yale.edu/about/policies/access">https://guides.library.yale.edu/about/policies/access</a>                                                                                                                       |
| <b>View in DL</b>             | <a href="https://collections.library.yale.edu/catalog/11631090">https://collections.library.yale.edu/catalog/11631090</a>                                                                                                                       |

---

(行發日一回一月每)行發本納日一月二年五十四治明

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

YALE UNIVERSITY LIBRARY



3 9002 10764 3307

# YOUNG WOMEN OF JAPAN.

## Meiji no Joshi

*Volume. IX*

*February 1912.*

*No. 2*

Sincerity.

Miss Matsu Okonogi.

The Holy Cup.

Mr. T. Shirai.

Purity.

Miss Tetsu Yasui.

One Who Can See God.

Miss A. C. Macdonald.

My Baptism.

Mrs. Asa Hirooka.

Salvation as Taught by Jesus Christ.

Mr. En Kashiwai.

The Result of My Friend's Efort.

Miss Miyo Kohashi.

Association Notes.

Call for the Observance of the Universal Day of Prayer for Students.

National Y.W.C.A., Tokyo Y.W.C.A.

The Official Organ of the National Committee of  
Young Women's Christian Associations  
of Japan

(東京神田美土代町三秀舎印行)

[illegible]

# 明治の子女

第九卷 第二號

明治四十五年二月一日納本發行(毎月一回一日發行)  
明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

## 目次

- ◎真情(一)……………小此木松子  
◎聖盃(四)……………風江  
◎純潔(八)……………安井哲子  
◎神を見得る人(一〇)……………マغدナルド  
◎受洗の後(一四)……………廣岡淺子  
◎耶蘇の説きし救(一九)……………柏井園  
◎人の惡癖を矯めし友の經驗(二三)……………小橋三四子  
◎會の消息(二七)……………小橋三四子

△萬國學生祈禱日趣意書△日本基督教女子青年會△東京基督教女子青年會

日 本 基 督 教 女 子 青 年 會 發 行

## 女子寄宿舎

基督教女子青年會は

小石川區水道町二十八番地

牛込區納戸町四十五番地

の二ヶ所に寄宿舎を設け女學生諸子の爲に及ぶ限りのお世話  
を致して居ります

右の寄宿舎は大西絹子、門倉ふじ子の兩氏が親しく監督して  
居ります。東京に家庭又は適當の保護者のない方々をして家  
庭に於けると同様に勉強の出来る様にするのが青年會寄宿舎  
の希望であります

入塾希望の御方は願書を監督者大西絹子氏或は門倉ふじ子氏  
に宛てゝお送り下さい。

尙同舎は一時の宿泊も許しますから、講習等の爲に御出京の  
方々にも宿泊の便宜を計る事が出来ます。

寄宿舎委員長 今 西 糸 子

## 明治の女子

一、「明治の女子」は日本基督教女子青年會中央委員が發行する  
雑誌也。

一、「明治の女子」は一年分郵税共金五拾錢、一部郵税共金五錢  
とす。

一、日本基督教女子青年會は女子の衛生、社交、智識、靈性上  
の發達を圖るための團體也。

一、日本基督教女子青年會中央委員左の如し。

|                |                |
|----------------|----------------|
| 委員長            | 井 深 花 子        |
| 副委員長           | 岡 見 惠 子        |
| 書記             | 三 谷 民 子        |
| 會計             | 井 上 友 子        |
| 萬國基督教女子青年會同盟委員 | 河 井 道 子        |
| 萬國學生基督教同盟會委員   | 宮 川 美 子        |
| 東京在住委員         | 鈴 木 歌 子        |
| エ、ビー、ウ、エスト     | 中 島 小 春 子      |
| 平 野 小 春 子      | サ ラ、エ リ ス      |
| 中 島 小 春 子      | 小 此 木 ま つ 子    |
| フ イ、イ、シ、ヤ      |                |
| 地方在住委員         |                |
| 大阪 ケー、ス、リ、ス、ラム | 京都 佐 伯 小 糸     |
| 京都 ケー、ス、リ、ス、ラム | 名古屋 ウィンケイルソン   |
| 廣島 ケー、ス、リ、ス、ラム | 大阪 荒 木 幸 子     |
| 函館 ケー、ス、リ、ス、ラム |                |
| 日本基督教女子青年會幹事   | エー、シー、マ、グ、ドナルド |
| 同 副 幹 事        | エム、エル、マ、シ、ウ    |
| 同 同 副 幹 事      | ジイ、アアル、ワトネ     |

▷照参頁四文本◁

ドツハラアキ、一サ



## 明治の女子 第九卷 第二號

(明治四十五年二月一日)

## 眞情

小此木松子

此頃、久しく手馴れた古い文箱を開けて、あれこれと昔のものなど讀むて居りました中に、一つ取り分けて私の心を動かした古いカードがありました。それは、嘗て、某教會で私か受洗致しました折に、親しい友から祝つて寄越したもので、名高いラフェルの聖母を刷つた其カードの裏には、次の様な事が書いてありました。『私は今朝、大橋の上で、憐れな乞食の父子を見ました。一月の風の吹き荒び川岸で此二人の人間が互を勞はり合つて居る其様を見て私は、本とうに神様の様な人達だと思つて心に拜むて通りました。窮乏の境遇に居て自分を忘れる事の出来る人は有難いと思ひました。愛の發動、眞情の流露ほど人を感ぜさせるものはありません。あなたが、神様の道にお入りなされたと聞いて私は深く御

明治の女子 第九卷 第二號

悦びたいします。神の道に入つた人であつて始めて世の中に生き、人の眞情の美しくしさも、心から感ずる事が出来るのですから。』と云ふ様な事でした。まことに此友の言の通り、世に眞心ほど、人を動かす力の籠つたものはありません。世に敗殘の身である乞食の様なものでも、唯一片の眞心の發動に依ては、行路の人の足を留めて、心の中に拜ましめる事さへ出来ます。又罪人として捕へられ、惡人として嫌惡せられて居る者でも、尙一朝本心に立かへつて、眞の心の輝きを示す時には、其處に大いなる人格と、崇高なる識見とを表はします。是等は皆、人々各個の中に存する神性の發動とも申しませう。其神性の前には、如何なる威力も權勢も到底、頭を擧げて拮抗する事は出来ませむ。昔から、此自然に湧き出る人情の泉を汲むて歌ひ出した歌は數限りも無く残つて居ります。中にも彼の詩篇の如きは、殆ど世界の文界に比べ物の無いといはれる程、眞率な、絶え難い切那の眞情を吐露した

一

## 明治の女子 第九卷 第二號

もので有名な第二十三篇を始めデウイドの牧歌の如き、覺束ない譯書によつて讀むてさへに味ひ盡せぬ情趣が汲まれます、此れを我國の文學に見ても、古くは萬葉以降の古歌に、或は卑俗の小謠等に飾らぬ情の進つて居るのを、見るのは難しい事ではありませむ、又遠く古代の歌に求める迄も無く、是れを子供の生活に見て容易く發見する事が出来ませう。まことに修飾の無い子供の生活程美しくは、自然に、たとへば南國に咲く花などの様に香ばしいものはありません。其言ふ所、爲す所、悉く眞情の流露であつて、何の人工をも加へず、所謂俯仰天地に恥ぢざるものです、主、基督が「汝等子供の如くなれ」と仰せられて、幼い者を其胸に抱いて愛しまれたのは、まことに其天真の性を貴しとせられたものでせう。此様に美はしい小兒の生涯から青年期に進み、次で成年ともなれば、内外の刺戟關係相俟つて追々に天然を打破し、修飾を加へ、甚しい例に至つては餘程な攻撃、變化の起つた折々でなければ、昔ながらの人情の發動を見る事が無いといふ程にも墮落して來る者があります、死に瀕して始めて善心に立返つたといふ様な事は昔物語に俟つ迄も無く、

今日瀕々として起つ、ある事だらうと思はれます、此様に、虚偽と、口實と、便宜とで上を塗る汚され、殆ど、もとの人らしい色も見えぬ迄に、固め上げられた人間は、丁度下手に塗られた婦人の顔の様なとも見られませうか、美しい肉の色、自然が與へた健康の生氣は全く蔽ひ隠されて、残るところは、人工に成つた粉の色彩ばかり、これでは眞の活きた、動いてゐる、生の美を何所に求める事も出来ませむ、人の精神が斯うなり果てては、社會も全く其生氣を失つて、一切の温情は涸渇して終ひませう。此冷たい荒むだ有様が、年を追ふて著しくなつたと見た先哲は、早く前世紀に於て、『自然に歸れ』と叫んで居ります。さうして、宗教に、社會制度に文學に、此舊態破壊の聲が益々高くなつて來た其絶頂に建設せられたのが現世紀であるところから見れば、今の世に破壊の響きの喧しいのも敢て不思議は無いかも知れませむ。

然し、在來の惡風を破り、新たなる生氣を以ての社會に活動しやうとして眞面目なる目的の下に止むを得ず破壊を事として居る人が現今どれ程ありませうか、一種の新奇を悦び、舊きに飽いて進歩を銜ふ

人が多くは無いてせうか。實に此節ほど、言論の好  
 かれる、議論の蔓る、理屈の多い世の中は今迄無か  
 つた事だらふと思ひます、稍人心を得て着實の度  
 に進まふとする事は、忽ちにして世に忘れられ、捨て  
 て顧られず、更に新たなもの珍らしき者の悦ばれ  
 るのが、此頃の有様です。他人を批判し、批評する  
 を以て事とするものもあり、而も決して研究的な、  
 眞面目な態度に依る人ばかりでもありません。其結  
 果、事々物々の變轉の速かな割合に、實質に於て、  
 社會の内容に於いて其れ程の進歩は認められて居り  
 ませむ。是れは、外徒らに新奇に馳せて、内、盲從  
 に安んじて居る爲でありますまいか。口に新論を  
 唱ふる人にして果してどれ程其論に精神を注いで  
 居りませうか、實行に於ては、多く無責任な盲從に  
 終つて居る事が少くは無いと思はれます。是れは、  
 現代の様な社會の性質上、人は唯、一時の勇にはや  
 つて、永續の潛勢力を缺く爲であつて、此有様に續  
 くならば、世上の改革は遂に行はれず、却つて益々  
 浮華輕跳に傾きませう、彼の何々論、何々説といふ  
 ものも唯一時の誇りに過ぎずして永久に葬られて終  
 ふのでは、切角起つた智識界の活動も何の人生を益

明治の女子 第九卷 第二號

する事なくして終ります。  
 爾來、智的の要求も、もとはと言へば、人の本原  
 たる靈の生活を高めむか爲に起つたものに過ぎませ  
 む、それ故に靈の要求に離れた智能は其眞の價値を  
 失ふものと、いはぬばかりませむ。まことに如何な  
 る智的の活動と言つても、それに依つて、人の靈性の  
 存在を到底蔽ひ得可きでは無く、兩々相俟つて共に  
 言ふと智と靈との相伴つた發達を目撃する程、人の  
 一生に愉快な事はありますまい、學問上に於て、信  
 賴す可き長上が、其精神的な生活に於て亦一頭地を  
 ぬいた見識と實行とを具て居られるのを見る程、一  
 種の崇高美を感じる事はありますまい、人に於て此の  
 如くならば況して是れを我等の主、基督に求むる時  
 に、其最完全なる發達と調和とを認める事が出来る  
 のは最當なる事と思ひます。  
 此意味に於て、智能の發展は決して靈性の退歩を  
 示すものではありませむ。又理性の發達は必ずしも  
 眞情の流露を妨げるものではありませむ。日光に浴  
 し、生を樂しむの情は、人間あつて以來、變らざる  
 潮流で、現代の如き、生活難の時に當つて特に此

三

心を發揮せらる可き必要あるを感じます。唯此れに依つてのみ、人生は和らぎ温まつて居るのてはありますまいか。そうして其依つて来る源泉は、神にあり、基督にある事は忘れる事の出来ぬ事實です。

## 聖 盃 (上)

口繪参照

風 江 生

巻頭に掲げてある古への武士の畫は、詩人テニスンが身血を注いで歌つた英國アアサア王の武士サアガラハドを描いたものである、彼は心清く、武勇優れ、武士の典型とも云はるべきものであつたが、千辛萬苦を嘗めて基督が最後の晩餐に用ゐられたと云ひ傳へられる黄金の盃の所在を探し出したと云ふ古い物語から來たのである。

「我が利き劍は人の兇を利し、我が硬き槍は狙ひを過たず、我が力は十人の力にあたる、是れ我が心の潔さが故なり。」  
此の潔き英雄は、高尚なる目的の爲めに、あらゆる

敵と戦ひ、あらゆる誘惑に勝ち、常に「あゝ神の義にして忠なる武士よ、駒を進めよ、賞與は近し」との聲を聞きつゝ勇しく突進したのである。  
獨逸の文豪ワグネルも之と同じ物語を材料にして宗教上の趣味深き劇を作つて居る。散文に書き直すには寧ろ後者の方が面白からうと思ひ其の大意を左に擧ぐ。

四

聖書には基督が最後の晩餐のときに、葡萄酒を盛つた盃を取つて之を祝謝し、弟子たちに與へて飲ませたまふたことが書いてある。其の盃は後に、基督の爲めに墓を備へたアリマタヤのヨセフといふ人の手に入り、彼は基督が十字架に懸けられたとき其の脇腹から流れ出る血の滴を此の盃に受けたと云ふ物語が傳へられる。

かくて此の盃はすべての傷や痛を癒す不思議な力を存することとなつた。之を所有するものには、全き平和が與へられ、只之を見ればかりても地上で最も大いなる特權が與へられる。然し其の後此の聖盃は神の力で影を隠し、最も高尚で、己を犠牲にする精神に富んだものが、熱心に之を探し求むると

きは、時々現はれることがあつた。故に之を尋ねるものは、何よりも先きに自身の卑しい性質に勝ち總ての利己的な慾望を棄てねばならぬのであるから實に非常な難事業となつたのである。

英國のアサア王の圓卓と稱せられた武士たちが、此の聖盃を探つたといふ美しい昔譚もある。人々の心に感興を起し刺激を與へた此の幻象は、僅かに其のうちの二三のものしか見なかつたのであるが、彼等が之を探す爲めに何れだけ高尚になり、立派になつたか知れない、其の頃はまだ此の聖盃は定つた處に置かれなかつた、其れで人々は何處を何う探して好いのか解らなかつた。

或る國にチチュレルと云ふ勇敢な武士があつた。彼も此の聖盃を尋ねる爲めに、全生涯を獻げることを決心し、其の愛子をも伴ふて出かけた。其の子はまだ幼いが、往く／＼は武士にならうといふ心懸けのものであつた。彼等は神の恩寵によつて必ず其の目的が達せられると堅く信じて居た。此の小團體は長い間荒野を旅行し、谷また谷を渉り、奇軀たる岩の山路を通つて進んだ、彼等は途すがら出逢つた色々の人を助け、すべて世俗的高漫心を抛ち、只だ

親切と人道との爲めに骨を折つた。また彼等は夜も朝も聖盃を得る爲めに神に祈り續けた。

旅路の日數重なるにつけ、身は塵埃に塗みれ、疲労も次第に出て來た。然し少しも氣を挫かず、常に勇を鼓して進み進んだ、或る日暮れかゝつた頃茂つた森のうちに足を止め、一同此に一夜を明すこととした、彼等は毎日朝から晩まで旅行し、食物も餘り多く取らず、暫時休めば直ぐ何ものかが彼等を目的の地に急ぎ立てるやうに見えた。

翌朝早くチチュレルは起き上つて一行を起した。誰一人呟くものもなく直ちに起き上つて出かけた。不思議なことには次第／＼に深く進み行くけれど、毫も疲労を覺えない。休息と満足との靈妙な感覺が彼等の心に満ちて居た、かくて彼等は到頭聖盃の近くまで來たことを覺り、喜び極つて感謝した。

彼等が跪いて居るときに大いなる光が圍り照らし『起きよ、汝等人類のうちに、祝福されしものよ汝等の勞力は報いられたり。汝等をして聖盃を守護せしむべし。サルヴァット山と呼ばるゝ山近きにある汝等其の頂上に神殿を建てざる可らず、かくて汝等は聖盃の武士と稱へらるべし』と云ふ聲が聞えた

## 明治の女子 第九卷 第二篇

彼等が面を擧げると光は消えたが、其の面には此光榮ある任務を擔ふの喜びに輝いて居た。翌朝彼等は其の名ざしれし山に行いて神殿を建て始めた、世界中の最も莊嚴な神殿だと取り沙汰せられるに至つた、程なく落成して儼かな獻堂式を擧げたとき、光が其の堂に映して聖壇のあたりは燃ゆるやうに見えた。何れも其の前に跪いて居る間に、チチュレルは壇の前に進んで幕を揚げた。彼等が日夜求め尋ねて居た聖盃は、其所に貴く美しく輝いて居た。

かくて彼等は此の聖盃を守護する神聖な任務に従事することを喜んで決心した。すべての目的や慾望を抛つて祭司の仲間に這入つた。そして彼等のうち傷ついたものとか病にかゝつたものがあれば、此の聖盃の圍りに燃えて居る不思議の火によつて直ちに癒された。

チチュレルは久しい間其の任務を全うしたが、年老いたので其の子アムフォルタスが代つて聖盃の守護の長に命ぜられた。其の頃此の神殿に詣てたいと望んだ武士は多かつ

た。然し全く潔く、且つ誠實な生活を送つて居るものでなければ、誰にも之を許されなかつた。之を拒まれたもののうちにクリンゲルと云ふ有力なる魔術師があつた普通の遣り方では到底駄目だと見て取つた彼は、門番に賄賂を使つたり、或は様々の卑劣手段を用ゐなごした成功しなかつた。茲に於て非常に立腹し、何とかして復讐をしてやらうといふ恐ろしい量見を起し、此の神殿を破壊せしむる爲めにあらゆる悪手段を試みた。其の一つとして同じ山の一方に美しい花園を設けた。其所には百花常に爛熳と咲き亂れ、美しい果實はみのり、それに妙なる音樂は絶えず奏でられ、婀娜しい舞姫は蝶の如くに舞ふて居るといふ有様であつた。遙る／＼聖盃を尋ねて來た武士のうちには、可惜此の手に乗せられて其の宿志を抛ち、樂園に迷ひ入るものも少なくなかつた。

アムフォルタスは此の悪手段を聞いて大いに憤り神聖な槍を取つて之を攻めかの魔術師を斃してくれやうと決心した。此の槍は聖盃に次いで大切なものであつた。即ち基督が十字架に懸けられたとき、其の脇腹を突いた槍であつて、之を持つて居るものは信仰に忠義を盡し、總ての敵に打ち勝つ力が與へら

れた。然しアムフォルタスは熱心ではあるが、まだ餘りに自分の力に頼み過ぐるところがあつた。敵を見つけ出す爲めに山の彼方に動かした。すると彼は非常に疲れと渇きとを覚え、泉のほとりて休んだ。魔術師の詭計ありとは氣づかず、美しい果實を食ひ、泉の水を飲み、不用意にも其の涼い草原で眠つて了つた。之と共に大事に握つて居た槍を打ちやつた。かくするうちに彼は己が脇腹が遽かに鋭く激しく痛み出したので目が覺めた。覺めて見ると何時の間にか傷を負ふて居た。起き上つて向ふを見ると、クリングソルは槍を奪ひ取つて之を打ち振りながら勝ち誇つて居る。

アムフォルタスは取り返しをつかぬ罪を犯し、かの槍が敵の手のうちにある間は爲すことが出来ぬことを覺り、耻辱と悲嘆とを深く且つ切に感じ、其所を去つた。神殿に歸つて痛切に己が過失を懺悔した。然し脇腹の痛みは毫も癒えなかつた。殊に曾ては如何なる傷をも癒した聖盃の前に出ると、不思議にも、其の痛みは一層激しく増し加はるやうに感ぜられた。

毎日聖餐を守るときに、聖盃の蔽ひを取るのが彼

の職分であつた。然るに其の前に出る毎に苦痛がいや増すので、堪へ切れなくなつて、其の務めをすることゝ減するやうになつた。他の武士も之を心配して色々骨を折つて見たが、總て無効であつた。或る日彼が神殿で祈つて居るとき、聖盃のあたりに燦然たる光が輝いて、次の如き聲が聞えた。

隣みによりて與へん

吾が誠實なるものを。……

汝、彼の來るを待つべし、

我が意志の行はるゝまで。

アムフォルタスは此の意味を了解することが出来なかつた。然し少しは其の心が輕くなつた、遠からず傷の癒されることを信じ、彼も其の同志のものも喜んだ。

其の後久しい間何んの變りもなく、何うすることかと思ひながら、耐へ忍んで祈つて居た。己が肉體の氣力を維持する爲めに努力し、日々沐浴して、鎮痛劑を塗つた。然し其の傷は少しも癒えなかつた。

## 純潔

安井哲子

吾々の心程不思議な者はありません。喜びに充ちて居れば此世界が實に楽しく見え、悲みに沈んで居れば同じ世界に憐れを感じ、愉快に聞えた鳥の音さへ俄に悲哀の調子を帯び、美しく眺めた花さへも無常を感じしむるやうになります。又心の暖かい時には周囲の人々が「なつかしく見え、冷い時には「うるさく」感ぜらるゝのも之れと道理であります。試に吾心の持ち方を種々に變化して見ますれば定めて面白い實驗をなし得るであらうと思ひます。そこで此世界や周囲の人々の實際は假令どうであらうとも、吾心の持ち方て之れを善化し、美化し得るならば、吾々は如何に幸福な生活をなし得るでありますか。

ところが此世界を美化し善化するといふ事は誰にでも出来るといふ譯にはまゐりません。美を感じ得

る人にして初めて美に應じ、心の清き人にして初めて清さを感じ得るのであります。彼愛らしい天使の如き幼児すらも、或種の人々には「うるさい」と感ぜられ、甚しきは虐待さへも取てされるのであります。實に不思議な者は人の心で、恐るべき者も亦人の心であります。其故に吾々は吾心の塵を拂ひ、汚を拭いて明に善と美との世界を心の鏡に映したいものであります。心の清き者は幸なり神を見る事を得べければなり」とは即此處で、實に意味深遠なる言葉であります。吾々は不完全なる人間でありますから、絶対に純潔なる事を得ませんけれども、而も若何等一點の偽りなき心を以て神の前に立ちました時には、明に心に神を見得るのは屢實驗する所であります。此時程吾々の清い時はなく、又此時程吾々の強い時は御座いませぬ。人間の最無力な場合は己を偽り、他人を偽り、神に遠ざかつた時で、彼惡事を爲した人が、此廣い世界を思ひ狭めて、其朋友さへも恐れるのは即此處であります。

私は曾て誘惑の奴隷となつた人に接した事がありましたが、其不安の態度、落付かぬ心狀、吾罪を他人の前に辯護せんとする苦心、偽りに重ねるに偽り

を以てする苦痛、實に憐れなる者でありました。此時に私に起つた感情は、何を苦しんで吾々不完全なる人類の前に己れの虚價を現はさうと努むるのであらうかといふ事でありました。若此人にして吾心を明に知りたまふ者が、吾背後に立ちたまふ事を認めました時には、苦痛を忍んで工夫した種々の虚偽は、何等の效力をも奏さなかつた事に心付くでありませう。人類より受くる非難は忍ぶ事が出来ませんが、正しい神の判断には到底堪ふる事が出来ません。故に先己れを偽らざる事は心を清くする第一歩で、心を清くする事は至善至正なる神を認むる唯一の方法であります。かくして清い心を以て清きを感じ得る時には、弱者も之れがために立ち、貪しき者も之れがために其心を富ましめ、賤しき者も之れがために自然其心を貴うするやうになるのであります。要するに此世界を美化し善化して最幸福愉快なる生活を樂しまうとするには、先此善美に感應し得る心を造らねばならず、之を造るには先最從順に最誠實に神の前に己れを現はさねばならず、かくして至善に接近し得れば、茲に初めて至善なる感化を得て、次第に純潔なる境に進む事が出来るのであります。

明治の女子 第九卷 第二號

せう。純潔なる者は自然の結果として自ら威厳があり、如何なる誘惑も之れを犯すの余地を見出す事が出来ません。従つて無意識に惡を制服し得るの力が出来、此世は實に安全な楽しい場所となつて、所調善化し美化し終るのであります。然るに悲しいかな、吾々は未誘惑と奮闘しつゝある時代で、戦はずして之れを善化するまでには、前途實に遠くあります。此域に達せんがために、私共は努力して心の鏡を磨きたいのであります。

枯野にほふ水仙花  
たが心になして見ん  
霜雪深くみだるれば  
いやまし清くにほひゆく

雨江

## 神を見得る人

マグドナルト

「心の清きものは幸なり。其人は神を見る事を得べければなり」と馬太傳（第五章、第八節）に申してあります。此清いといふ事に就ては、種々な例もありませうが、一番よく此意味を表はして居ると思はれるのは、例へば、日の光の美しく輝いて居る、日本の冬の景色などせう。私が近頃、前橋に参りましてから、此神々しいと思はれる様な美事に晴れた冬の日が續きました。其何ともいへぬ高い蒼天澄み切つた空氣の色、そこへ、豊かに、温かく光を投げて居る太陽、是等のものは皆擧つて或唯一つの事實を私に示して居るのだと感じました。即ち、吾々人間と自然、或は此大宇宙との間には、直接の關係同情がある。人間と自然物との間には何者も引裂く事の出来ない密接なる交渉のあるものだといふ事

を悟りました。此様に豊かな太陽を見、地上に投げる光を見るものは、態々、科學的研究による迄も無く、一見して直に、太陽が地上に及ぼす影響を観察する事が出来ます。溫氣を送り、光線を送つて、此地上を美化して居るのが、太陽であるといふ事は何人にも容易く實驗し得る事でせう。是と殆ど同じ様に、吾々の精神上の生活を考へてみますと、思ひ當る節々が澤山にあります。丁度、冬の空が、高く晴れて、空氣の澄み渡つて居る時に、私共の精神上の空氣が澄み渡つて居りましたならば、吾等の心の奥にあつて、光と熱とを常に與へる、神の存在をも明らかに認める事が出来ませう。眞に此意義に於て、神は太陽の地上を美化するに私共の生涯を光に満ちたものとなされます。此光此精神的太陽が、認められた時に始めて、私共は新しい生活に入つたと申す事が出来るのです。其時にし始めて「新たに造られた者」といふ意義が明らかに成つて来るのです。其時にはもはや誰に説明を乞ふ迄も無く、又神學の奥義に依つて研究する必要も無く、神の存在といふ事は、明かに吾々の心に意識が出来るのです。此境に進む者には、議

論も要らず、定義も要りませむ。唯「心の清きものは幸なり、神を見る事を得ければなり」といはれた言を繰り返し味ふ事が出来ず。  
私が前橋に假寓して居ります間、幾朝となく早天に戸外に出ては、曉の山々を仰いで見ました。さうしては何時も、他の山々の上に高く聳えて、厳かに立つて居る淺間を見たのですが、或朝には是等の山が、まるで見えて居ない事がありました。其理由は決して山が無くなつたのではなくて、雲霧が立蔽ふて私の眼から隠して終つた爲なのです。それから、又、よく眼の達く者が見たならば、まだく、澤山遠國の山々までも見えただのせうが、いくらお天氣の日にても、私には極近傍の山脈より見えませむでした。何故かといふに、私の視方の少ないが爲で、私に遠く廣く視るだけの力が無かつた爲です。然るに基督の仰せられた言葉には心の清きものは神を見る事を得とあります。此御言はよく味ふて見ると實に深い意味が籠つて居るので、心さへに清かつたならば、精神上の視力には決して限度が無い、何處までも見える。即ち神の存在をさへ認める事が出来る」と云つてあります。神を見て、自ら其子であるとい

明治の女子 第九卷 第二號

ふ事の自覺が出来れば、凡そ世界の萬事を知り盡したものと云ふ事も出来ませう。即ち、子として父の權威と愛との下に神の道を踏みのが、人生の意義に他ならぬのです。  
然らば基督のいはれた「心の清きもの」とは何の様なものか。先づ第一に考へられるのは、志の清いもの、清い正しい動機に依つて働いて居るものといふ事です。如何なる志を以て働か、學び、生活して居るか、其志を公明正大に世間に發表して恥ぢるところが無いが、確に誇るに足る可き動機に依つて仕事を居るか、どうかといふ事が、第一の問題の様に思はれます。若し「利己の目的の爲に活動して居るものならば、それは丁度少さな火鉢に手を暖めて、大いなる太陽——熱と光と喜びとを與へる太陽ある事を忘れて居る様なものになります。」「サー、キアラハッド」の話に依つて見ても、よく判る事です。彼れが、聖書を搜ねて旅から旅へと進む道には、何の困難も苦痛も消え、如何なる強敵にも打勝つて、其目的へと近づきました。アーサー王に扈從した多くの騎士の中、唯此人だけが、彼の非凡の寶物、聖書を目標とする事が出来たのですが、そ

一一

## 明治の女子 第九卷 第二號

れはいふ迄も無く、彼に唯一つの目的あつて、他を忘れたが爲であつたのです。世俗一般の野心の如きものは、此騎士に取つては、何の價値も無く、生涯をかけて誓ひ求めた其實の他は、彼の眼に映ずるものも無かつたのでした。然し是れを思ひます時に、自然と私共の心に浮ぶ間は、何の助けを以てサー、キアラハッドは其一生の目的を遂げる事が出来たかといふ事です。是れに對しては、テニソンが、其詩の中に説明して「我劍、人を斬り、我槍人を斃す。我力、十人に優れたり。是れ我心清さによれり。」と申してあります。此様な力、是れが、私共が人生の戦に必要とするのではありますまいか。言を換へていへば、凡て何事をするにも、志を一つにする、真理のためにのみ働いて、利己の爲ては無いといふところに非常な力と強さとを生じて來るのです。

一體、私共の精神的な生活と外面に表はれる動作とが、どれ程迄に密接な關係があるものかといふ事は、あまり人の考へて見ない事です。或人のいつた言に、「人の内的生活は即ち其人である」といふのがありますが、實に、其通りで、心の中の働さと外面に表はれる動作とは、やがて同一のもので、決して別々に

分類する事は出来ませむ。さうすると私共が、内々て、心の中に考へて居る事を、悉く人の中に擲けて見せても恥しくない様な考へかりを持つて居る様に力めねばならぬといふ事になります。どうせ、人間は晩かれ早かれ、何時かしら其思索の中の中までを他人に見せて居るのです。譬へ自分達が如何程蔽ひ隠さうとしても、私達の起居動作、日常の生活がそれを悉く發表して居るので、其證據には人々の顔を見るのが一番早道です。唯顔に現れた點だけで、人の性質は大體定める事が出来ませう。不平に満ちた友達は、大抵其顔色で窺ふ事が出来ませうし、惡心を隠し汚れた情を隠して居る人は通りすがりにても、直に指摘する事が出来ませう。何の深い考へ無いといふ人はまた其通り、顔に明瞭と表はれて居るのです。約翰默示録の最終の章の中に、神を知り、神を信ずる後世の美はしい社會の事が書いてあつて、「僕ども等、これに事へむ。僕ども神の面を見、神の名、彼等の額にある可し。」とあります。是を今の世の人に見ますと、神の御名の代りに其額に書き付けてあるものは、人々を支配して居る感情です。中には、不平不満を額に表はして居る人もあり、或は喜悅幸

福に溢れて居る人もあります。此喜悅に溢れた顔にして、始めて美しく輝いた顔といふ事が出来ませう。又此様に幸福に、自己を忘れて生きて居る人にして始めて清い生涯を送る事も出来ます。是に關聯して考へられませう事は、讀み物と性格との關係です。誰にしても多少の忙しさはあり、從つて凡ての出版物を悉く讀む餘暇はありません。其處で第一に考ふべき事は、高い趣味を養成するといふ事です。更に高い、面白いものゝある事を氣付かない中は、つまらない小説でも讀むで楽しむかも知れませむ。譬へば劣情を動かす様なものを讀み續けて飽きる事を知らぬ者もありませう。此等の人は知らず／＼の中に其心迄も汚されて、其種のものゝなれば遂には面白味を感じない様な事にもなります。さうなつたが最後、其人の想と情とは全く濁つて終つて、眞の人生の源泉に觸れる事は出来なくなりませう。此世の中で、眞に人を感動させる力あるものは決して劣情では無くて、惡と戰つて是に打勝ち劣情を抑えて超然たるに至る其處にあるので一人でも此種の勇者が在つた爲に、それだけ世の中が進歩したといふならば、其處に眞の價値は見えるのです。それ

明治の女子 第九卷 第二號

ですから、嚴しい意味でいへば人生は即ち勝利であつて、失敗ではありませむ。人生は精神の生活でありて動物的肉體の生活ではありませむ。人間の肉體生活の最下等を寫したものを讀むよりは、畜類の生活の最甚だしい有様を書いたものを讀む方が遙によいと言はれませう。若し人間にして向上生活をのみ想ふて此世を送つたならば、どれ程、高い思想が湧いて來る事でせうか。非常なる高地に登つた經驗のある人には誰にても分る事です。其澄み切つた高地の空氣を吸つて、塵を離れた心持は、まことに神に近づいた様な一種の意識を感じますものです。精神の清らかなといふ事は吾々誰でも最深く考へる可き事です。低い處に眼をつけて。つまらぬ事に齷齪し、利己の爲に日を暮すのが私共の一生の仕事ではありませむ。少くとも自分が此世に出たが爲に幾分の助けを世に残さうといふならば、サギ、アラハットの心掛けて、終局の目的の爲に、猛進しなればなりませむ。さうして此意味で眞面目に考へた時に始めて心を清くするの必要と責任とを感じて來る即ち、我等一個の改善の爲ばかりで無く、社會一般の進歩の爲には一人／＼の者が、志を清うする

必要のある事は明かです。使徒ポールが、其友に送つた手紙(腓立比人書、第四章、第八節)の中に「兄弟よ、終りに我是れを言はむ。凡そ眞實なる事、凡そ敬ふ可き事、凡そ公義事、凡そ潔き事、凡そ愛する可き事、凡そ善稱ある事、凡そ如何なる徳、如何なる譽れにても、汝等、是れを念ふ可し。」と見えてあります。眞に心の清いものは神を見る事の出来る幸いなものといはなければなりません。

聖アウガスチンが嘗て問ふて曰はく、「この世に於て最も幸福なる者は何人ぞ、思ふにそれは凡て欲するものを有する人にあらざるべきか」と、その母モニカは直ちに之れに答へて「否とよ、それは當らざる事なり、先づ其の人の欲するものが善なりや惡なりやを見分けざるべからず、何となれば善を欲し、善を有する人のみ誠に幸福といふべくして、惡しき事を欲し、惡しき事を有すれば、それは必ず不幸の人なるべければなり」と。アウガスチンは大に感歎して「あゝ母上よ、母上こそ哲學の奥深き眞理には達したまひたれ」と。

## 受洗の後

癡 話

一四

廣岡淺子

### 第一 信

御寒さ厳しく候へ共いよ、御清榮の御事と御喜び申候。初過る二十四日午前十時、無滞受洗いたし候。更生の淺子は一層社會の爲、神の福音を弘むる責任を自覺致し、殘る生涯は靈肉ともに神に任し奉る決心にて、萬事安心致し候。其の當日の實況を左にあら／＼申上候。

例年クリスマスマスの洗禮は日曜學校の青年男女に限り候事とて、當日も受洗者十名の内九名は十三四歳より十八九歳迄の青年男女にて候ひし。私は殊更らにこの子どもの中に入れて載くやう御願ひ致し候。九時三十分に會堂に参り、十時に洗禮式初り、式終りて宮川師は九人の青年の爲め祈禱あり、次で私の爲更に祈禱せられ候。「聖なる父よ、此中の一人の老婦は、我國維新の際

種々なる困難を一身に荷ひ、家政の爲、將た國家事業の爲、苦心奮闘を續け、晩年に至り、同性の向上發展を促さん爲め非常に盡力を致しました。然れども是れ物質上の事にして、靈の生命の添ひ難きを悟り、齡六十、多くの人は碌々として退隱爲すべき時に當り、老婦は奮然起て神の道を學び、残る生涯を神に捧る決心を爲し、則今日爰にバプテスマを授け給ひし事を、誠に有り難く感謝し奉る。どうぞ主よ、此老婦の前途誤ちなく、世の爲、人の爲に盡し得る力を與へ給はん事を、尊きイエス、キリストの御名の爲に只管に希ひ奉る。アーメン

と、清らかなる祈禱の聲は堂に響き、神の御前に在るを深く知り、云ひ知れぬ感に打たれ申候。右終りて更に説教「祈禱の意義」と題してお咄に相成候。此説教は何れ寫を待て、御目にかける事に致すべく候。吳々も女子が覺醒する事は急務中の急務に御座候間、折角御修養御勉學相成候て、聊かにても眞の結合の團體を御營み相成度希ひ上候

## 第二 信

……神に祈りて御修養を御續けに相成候はゞ智識

明治の女子 第九卷 第二號

も思想も自からに加里申すべく、偉大なる力神より與へらるゝ事と確信罷存候、……小子病氣は自分の心持は最早何等相障もこれなき様存じ候得共、未だ全快とまでには行かぬ由にて、此寒中は最静養の必要御座候やう醫師の注意により、外出を見合せ、静養罷存候。大阪に歸りてより受洗の時教會に参りしのみにて、何れにも外出致さず候。是れ則神の命じ給ふ所と存候。受洗後直に例の私の過度の熱情にて、所々に運動を試み候はゞ、或は失敗に失敗を生ずる事なしとも計られず、夫れを更生後更に慎重に修養せよとの神の教と存じ、日々私の居間にて讀書と祈禱とを熱心に相務め、修養と静養に餘念なく暮し居候。三月中旬にも相成候はゞ、身心ともに、全く善良に至り申すべく、其上は神のしもめとして、同性の爲め盡し度きものと相樂しみ居候。宮川先生は月曜日毎にお出で下され、外、奥さん連中五六人も御出にて、御講話を承り居候。御尋ねの私受洗に就ての所感、左に認め候。文章を調へ居候ては、とて間に合ひ不申と存じ候間、只心の感じの儘を相并べ置候。宜敷御取捨願上候。

## 余の受洗に就て

先き頃本誌上にも發表致しましたやうに、私は幼少の時から男子の爲すべき學問や諸藝を好みました。同時に我が國の男尊女卑の習慣に就ては、如何にも不道理であると慨嘆致して居りました。十七歳で廣岡家に嫁しまして、間もなく維新の變革に遭遇いたし、當時大阪の大家は多數破産の非運に陥り、廣岡家も亦その數に洩れませんでした。時に私は境遇上已むを得ず家政改革を双肩に荷ひ、男子を率ゐて事業界に身を投じ、東奔西走苦心奮闘を續けました。事二十有余年、其の間に我が國の發展を計るには、どうしてもわが同性の覺醒の大切な事を深く感じ、我が事業半ばなりしにも係らず、婦人會、女學校等に微力を傾注致しました事約十五年でありま

す。熱々過去四十年の事業の成績を鑑む時は、形式上聊か見るべきものはありませうが、自分の理想から考へては、實に物足らぬ事甚だしき感があります。夫れは女子の發達が如何にも遅々として、社會改善の任に當る勇氣に乏しく、未だ男子に盲從する域より脱し得ざる爲め、男子の放縱の一事さへも、制裁するの力がないのであります。爲めに彌男子は淫猥を恣にし、刃を以てせざるも精神的に女子を慘殺しつゝある者、實に幾千萬なるを知らず、しかも尙人たり、國民たる自覺なき女子は、只我が一身の虚榮を貪らんが爲め、下劣たる男子に媚びて、その我儘、墮落を助けつゝある有様であります。偶々高等教育ある婦人にして、表面國家の爲め、他人の爲めに盡力するが如きも、之れ他人を梯子にして、自己の名利を恣にせんと他は非ず、故に一朝自分より勝れる者に遇へば、共に手を携ふどころか、却つて是れを排斥して、只々己れの勢力、野心を恣にせん事に汲々たる有様であります。かやうな婦人界を如何にして改善し、いかにして向上せしめたならばよいかと、非常に頭を悩ました。遂にこれは深奥なる宗教に依り、人間の本源を清め、更生を計らなければ決してその改善、向上の能はざる事を深く感じました。而してこれを人にのみ求めて居る事は間違ひであると氣付きました。是れ迄私は若い方々に向つて「私は女としては特種な境遇を通つて來たのだから、従つて婦人としての缺點が澤山ある。どうか私を見習はらずに立派になつてくれ」と申し

ては、いつも自分を例外に於て人を導かうと思ひました。然しこれではとても人を導く事が出来ない。キリストの申されたやうに「われを見よ」と云ふ事が出来る人間にならなければならぬと感ぜ、先づ自ら靈的生命を求めやうと冀つたのであります。時に私は六十歳の遷曆の齡を迎へたのであります。それ故に新たに幼児に立ち歸り、三年を期して基督教に就て學んだならば、少しはその教へに就て知る事が出来やうと、宮川牧師につき宗教の講話を伺ふことに致し申した。然し私の頭は理屈ばかりで、さういふ哲學上から見た宗教に就ては話下さいと願ひし、十回程何ふ中に、どうしても人間の更生は、基督教に依らなければ出来ないと云ふ事が判りました。殊に婦人の發展を計り、その地位の向上を計るには、基督教に依るの外なしと知るに至りました。御承知の通り、儒教では一女子と小人とは養ひ難し」と申し、佛教では「蛇を見ることも女人を見る勿れ」と申して、何れも女子をば外視して居るのであります。神の前には男子も女子も同じくその愛子であるといふキリストの教へは、實に女子をして無限に向上、發展せしむる事が出来るものであると感

明治の女子 第九卷 第二號

じました。殊に神の前に高潔なる一男一女が相結んで夫婦となり、その夫婦の營む家庭が國家の基礎となるに及んで、此の社會の腐敗は眞に一掃さるゝのであると信するに及び基督教によりて救ひを求むるの念は愈々強くなりました。爾後聖書を學び、説教を承る毎に愈々その教への深遠なるを知り、靈的修養の妙味を養ふに至りました。殊に昨夏輕井澤に於て聖書を研究し、朝夕の祈禱を試みまして、多大なる神の恩恵に浴しました。そして一求めよ、然らば與へられ、尋ねよ、然らば遇ひ、門を叩けよ、然らば開かれん」との神の約束の偽りならざるを實驗致しました。其後九月中旬、東京に參り、なほその修養を怠らなかつたのでありましたが、一日友と園基を弄んだ所、不思議にも輕井澤にて經驗せる全く神の御前に在るが如き深き祈禱が出来なくなつたのであります。折節山室軍平氏に面會し、この經驗をお話すると、同氏は園基の遊びが悪いのではないが、然し目下求むる最大事を思はゞ、決して園基を弄する暇はない筈であるとして、眞率なる忠告を與へられ、なほ高潔なる神の教へを説かれました。是は私に取つて生涯忘れぬ神の教へと思ひました。然るに園

一七

らずも其夜より自分は病に犯され、續いて腎臓炎に罹り、少しの活動も出来なくなりました。丁度其際宮川牧師が傳道の爲め、上京の序を以て、私の病床を訪問されましたので病中の實驗を御話致しました。然るに宮川牧師も亦其れに付て、私の將來の爲めに忠告、注意等を心より與へられました。上述の言は、全く貴き神の聖意の兩氏を通して私に與へられた事と確信致しました。而して私の這回の病氣は、更生即ち舊淺子が死して新らしい人格を造り出したので有る事を自覺し、更生の印としてバプテスマを受け愈々神の聖名に入るの決心を強くしました。そこで昨冬クリスマスをして、受洗致しました次第です。然しこれは神の教の入門式であります。これより彌靈的修養を怠らざる様務めまして、クリスチヤンとして耻ぬ人格を養成せねばならぬと存じて居ります。愛する先輩の姉妹方よ、我々の責任は實に重、且つ大であります。將來相互に手を携へて、心を謙遜にし、誤りを正し、只管基督の御足の跡を辿り、只善事を口にするのみならず、これを行ひに現はし、最高的人格に達せん事を誓ひ度いと存じます。又愛する後輩の姉妹方よ、どうぞ神の教を眞面目に

研究し、勇氣を振起して、斯教の門に入る事を決行なされ、而して一日も早く暗きを捨て、光りを歩み、神より與へられた靈をその光りによりて清く、高く導き、なほわが受けたる恵みを隣人に頒つて、光輝ある社會を一日も早く成立致す事が出来るやう共に力を致されん事を切に祈つて止まぬのであります。

さる一大哲學者の曾て謂ふところを聞くに、凡そ人間の宗教的情念といふものは、或人のいふたやうに決して見るべからざる自然力を迷信的に畏怖するのに基づくものでなくして、全く宇宙の無限なるに對し、自己の有限なることを自覺するのに出づるものであるといふことである。而して此自覺するや、人が到底之を消すことが出来ないのみか、却つて其知見の開展するに従つて、益々明確に感得せらるゝ者である、是れば恐怖とか、迷信とかに由來する者ではなくして、吾人が有限なる能力を持つ有限者であつて而も無限者の前に立つて居る者であると認識する其事實に基くのである、吾人は常に人間本來の理想に慓はざることが多い。故に吾人は一毫の罪咎も無い主基督に對つて其慰藉を仰ぎ求むるのである。

## 愛書研究

## 耶蘇の説きし救(一)

柏井生

(一)多方面なる事實  
 『人の子は喪はれし者を尋ねて救はん爲に來れり』  
 と基督の自ら宣言せられた如く、彼が一代の事業は  
 人を救ふを以て目的とせられた。カナの婚禮の席上  
 で奇跡を行ひ人の困つて居るを救はれたことから始  
 まつて、十字架に死なれたことに至るまで、事々人  
 を救ふたのでないものはない。山の上の説教の如き  
 専ら倫理道徳を説かれた如く見ゆる所であつても、  
 其の根底には救の教が横はつて居るのである。然る  
 に茲に不思議な事は、耶蘇の言のうちに救と云ふ文  
 字の稀なことである。馬可五〇三十四、十〇五十二、  
 路六〇九、八〇四十八、五十に『なんぢを救へり』  
 とあるのは、病氣が癒えたと云ふ意味であつて、靈  
 魂の救を云ふのではない。故に改正英譯の聖書には  
 『健にする』made whole と譯してある。このやうな

明治の女子 第九卷 第二號

意味でなく靈の救と云ふ意味では路加十九〇六、約  
 四〇二十二、路加十九〇十、馬太十三〇十一に見ゆ  
 るばかりである。救と云ふことは多方面で活ける事  
 實であるからただ言で意味を盡すことが出来ぬ。そ  
 れ故基督は、或は罪を赦さるゝとか、神の國に入る  
 とか、神の子となるとか、其の各方面に就きて具體  
 的に説かれて居る。これ等を綜合すれば救と云ふ活  
 ける事實が出来て來るのである。救と云ふは形式的  
 のものでない。生活の救であり又靈魂の救である。次  
 て其の要素を順次に説明して行こう。

## (二)罪

救と云ふ事實が成り立ち得る基礎が少くとも三つ  
 ある。第一は神の性質である。神は愛の補であつて  
 一人の亡ぶるをも好みたまはず(馬太十八〇十四)、  
 一人の人が悔ひ改むるならば天に大なる喜がある。  
 神に人を救はんと欲する御心があることこれが救の  
 有り得る第一の基礎である。第二は人が之から救ひ  
 出されねばならぬ罪があると云ふ事である。第三は  
 人に救はるゝだけの價値があると云ふことである。  
 こゝには先づ罪の事を考へて見たい。耶蘇は罪とは  
 どのやうなもので何處から來たと云ふやうな理論學

説を述べられたことはない。むしろ現在の事實に就いて罪を指し示された。

耶蘇は罪と云ふものは誰にもあるものであつて、普く人類に行き亘つて居ることを認められた。健康なるものは醫者の助けを借らず」と云はれたことはあるけれども、あれは一種の反語で、救ふ必要のないほど義しい人があると云ふ譯ではない。何となれば彼が一般の人の則るべき型として教へられた祈禱のうちにも『我等の罪を赦したまへ』と祈ることを教へられ、又馬太七〇十一に『汝等、しきものながら善さを賜を其の子に與ふるを知る』と云ふ言がある。罪にもいろ／＼種類がある。耶蘇は品行不潔の罪を惡まれた。右の目汝を罪に落とせば袂き出して之を捨てよ』と云はれたほどである。然し彼は偽善、高慢、無慈悲、人を判さ人を救さぬやうな罪を一層深く惡まれた。不義をした婦人よりも、此の婦人を曳き來つて耶蘇を陥れる機會を見出ださうとしたバリサイ人の罪を一層深く憎まれて『汝等の中罪なき者先づ此の婦を石にて打つべし』と云はれた話が約八章の始に出て居る。又馬太二十五〇三十一以下には未來の裁判の話が出て居るが、これは未來の裁判は

此のやうなものであると云ふことを教へる爲でなく、目的は別にあるのであるが、彼處でも裁判の標準は何を以てするかと云へば、愛があるか否と云ふ一點に歸する。愛は道德の極致であるからこの愛のないのは罪の大なるものである。それから基督は、神に對する罪と人に對する罪とを區別せられなかつた。路加十五章にある放蕩息子子の譬話のうちに放蕩息子が父に詫びる語に『我れ天と汝の前に罪を犯したれば』云々とある。又『最と小さなものになさざるは即ち我になさざるなり』(馬太二十五〇四十五)と云はれた。人に對して罪を犯すは即ち神に對して罪を犯す所以であつて此れは人だけに對する罪で神に對しては罪とならぬと云ふやうな罪はない。此の事は非常に關係の大なる事となつて、世のなかには一面には人に無慈悲な事をしながら神に媚びて幸福を祈ると云ふやうなことが多いが、基督の教にはこれあるを許さぬ。

又耶蘇は現在の有様のみならず、將來の事を計算に加へて罪の大小を定める。其の人が今は悪い所があつても善き事聖き事に觸れ得る機會があり、又それなら先々善き方に進み見返があるならば罪の輕め

らるべき理由があるが、之に反して今は善い人のやうであつても一層善くなる道を杜ぎ聖き力のはいつて来る機会を棄つるものは其處に輕からぬ罪があるのである。耶蘇は聖靈を瀆す罪は赦されぬと説かれた(馬可三〇二十九)、これは嚴な言であつて充分には解らぬが、思ふに聖靈は神から善き事が人の心にはいつて来る道である。好んでこの聖靈に反抗し之を杜絶するものは、罪の赦さる事の成り立つ見込がないと云ふ事も其の一の譯であらうと信ずる。

耶蘇は又怠りの罪を警られた、神の國の精神は一面謙遜であるとともに一面努力である。謙遜の反對の高慢頑固が罪である如く、努力奮勵の反對の怠慢は罪である。主人から托せられた金を活用せず手巾に包んで地に隠して置いた僕は『惡しく且つ怠れる僕』と云ふ叱責を受けた。基督の精神は向上である。向上せずんば墮落する。

其れから罪の譬喩であるが、耶蘇は罪を病にたとへられたこともあるが、より多く屢々負債にたとへられた『我等の罪を赦したまへ』と云ふ所が馬太五〇十二には『我等の負債を赦したまへ』となつて居る。其の外馬太十八〇二十三以下、路加七〇四十一

明治の女子 第九卷 第二號

以下にも負債を免する譬喩がある。負債が罪の譬喩として適して居る點が二ある。一は負債は病氣よりも責任と云ふ意味が強い。一は病氣は忽ちに直ると云ふことはあまりないことであるけれども借金に拂ひさへすれば、又人が代つて拂つてくれるれば忽ち無くなるのである。罪も亦忽ち赦れて潔白なる身となるとが出来る。然して負債が人の重荷となり人を苦しむると同じく、罪も亦靈魂の重荷となり人を萎薇せしむる。

### (三) 救の方法

耶蘇が由て以て人を罪から救はれた方法の第一は彼の言である、教である。耶蘇の與ふる救は魔術でない。罪の恐るべき事、神の恩ある事を知らし其の靈魂に光を與へて之を生命の道に導くのである。彼の祈のうちに『汝の眞理をもて彼等を潔め給へ汝の言は眞理なり』とある(約十七〇十七)。パウロも『信仰は聞くより出て聞く所は神の言に由るなり』(羅馬書十〇十七)と云つて居る。ペテロも『汝等が再び生るるは朽つべき種に由る非ず朽つべからざる種即ち窮なく存つ神の活る道に由るなり』(彼前一〇二十三)と云ひ、又『今生れし嬰兒の乳を慕ふ如く

## 明治の女子 第九卷 第二號

汝等心を養ふ眞の乳を慕ふべし此に由りて汝等長ちて救に至らん』(同二〇二)と云つて居る。聖書に傳へられた基督の言を良く味ふことは救を得る一の大なる道である。

第二の方法は奇跡であつた。耶蘇の行はれた奇跡は盡く愛の表現である。彼は己の力を示すために奇跡を行はれたのではない、又奇跡を見て信ずる信仰を尊されなかつた。奇跡は證據でなく救の一部分其の表現である。奇跡は何を示すか。第一は耶蘇が人の肉體の病を癒し給ふたのは靈魂の病を癒す力あることを表すのである。第二は彼は個々の人を救ふことを示す、衛生演説は幾千幾百の人に一度に聞かせることが出来るが、醫者が病を癒やすには一人一人の脈を診つて薬を投じなければならぬ。耶蘇の教訓だけでは、一人一人と云ふ事が良く現れぬが、病を癒した事に由つて其の事が明にせられた。第三は救は全身の救である云ふことがわかる。最も大切なものは靈魂の救であるが、しかし靈は全身を支配するものであるから心が全く救を得た時には、精神のみならず一切の事に新しい生命が加はり力がいづて來るのである。奇跡と云ふことは基督の在世せら

れた時分と今日とは大分事情が違ふのであるが、奇跡によりて現はれた精神と力とは今日と雖も昔にかはるとがな。奇跡を信ずることの出来ぬやうでは救はることは難い、ここが今日我等に欠けて居る所である。

最後に又最も大切な事は、耶蘇を信ずる信仰である。これは次回に詳かに述べることにした。

吾人は父てふ語に、多大の意義を附し過ぐること決してあるなし。此語は基督教的の神性の總體にして、又たその骨髓なり、こは此語の自然的意義を精神化したるよりも遙に大なり。十字架を以て此語を解釋する鍵となし來れば、こは全く超自然的意義を帶ぶるに至る、此語の意義を淺薄にすること、寧ろ吾人が常に陥り易き弊に非ずや。この意義の十分に發揮せられたるは、古往今來唯だ一回あるのみ。こは「父よ彼等を救し給へ」てふ、基督の信仰と事業とに顯れたり。「父よ」是れ基督の信仰なり、「彼等を救し給へ」是れ基督の事業なり。神的父格の眞髓は聖性によれる赦罪にあり。此に至りて始めて福音的なりといふをうべし。これ聖性に對する犠牲に由りて、罪惡に處する恩寵の事柄にして、人に對する服役に由りて必要に應ずる愛の事柄以上に屬す。

—— フォルサイス博士

# 人の惡癖を矯めし友の經驗

經

驗

三 四 子

或る土曜の夕ぐれ思ひがけなく數年相見ざりし友の來訪に遇ふ。二人は級こそ違へ、同じ寄宿舎に起き臥した親しみがあるのである。友は卒業後間もなく郷里の宗教家に嫁がれて、〇〇の山の奥に、夫の事業を助くる傍、或時は女學校に教鞭を執られた事もある。私は何よりも友のしんみりとした、落付きの出來たのを尊く打まもられた。その堅實に積まれた經驗が、あたやかに語り出されるのを聞いて居ると、喧闐な社會を遠く離れて、靜かな自然に圍まれ、急せらず、驕らず、人生を深く味ひつゝ過して居る友の平生がまのあたりに浮んで、心地がすがすがしう覺えました。歸られた後に私は何つた經驗をどうか皆様に頼みたい様に思はれて、心に殘つた所を記して見たのが次のものです。丁度その日は寄宿舎の舎監をして居る他の一友から、悲しむべき癖

明治の女子 第九卷 第二號

を持つた生徒の處置に就て相談を受けて居りましたので、自然その問題を解くに就ての参考となるやうな事が集められて居ると、後で讀んで思はれました。「親は年經りや、不具の子なりや、人てなしなら猶更らに」と申す親心に増さるとも劣るまじき人の師の心遣ひを深く思ひ、同じ心遣ひにある人々の参考に成る事があれば幸であると思ひました。これからが友の話です。

夫が布教の爲め全國を巡つて居る間、私は郷里から少し離れた某市の女學校に奉職して居りました。自分の教へ子が一人でも失はれるといふのは、何物にも代へ難い悲しみで御座います。そしてその失はれる始めは、ほんの一すした不注意が原因となると思へば、教師の心遣ひも疎かでは御座いませぬ。私は道を誤つた子供に就ていろいろ調らべて見ました。が、何よりも居場所の不注意から起る事が一番多い様です。餘り敬ひ過ぎて、御無理御尤て通す家、例へばもとその子供の家に使はれて居つた者の家と申すやうな處、また餘り嚴格過ぎて冷たい家とか、不しだらで取締りがつかぬ家とか、さういふ家に居る

二三

## 明治の女子 第九卷 第二號

者がえて間違ひ易いものだと思はれました。私はどうしてもほんとうの教育をするのには、その子供と起臥を共にして居なければならぬ。従つて寮舎教育といふ事が一番大切であると思ひまして、先づ一人の生徒を預つて見ました處、その後諸所から頼まれて、十人計りを預る事となりました。私も他人と思はず、子供が米を磨げば、私は竈の下をたき付け、お菜の足りない時は分けて頂くといい様にしましたので、生徒もほんとの家の様に思つてくれ、誠に楽しい家族で御座いました。この子供達を皆卒業させる迄、その女學校に居りましたが、丁度夫も家に歸つて参つたので、私も職をひいて家に歸る事になりました。その時の子供達は他人とは思はれませんが、先方でも親類か何どの様に思つて、今でも泊りがけに遊びに参ります。

○ 奉職して居る間は随分失敗勝ちでした。一度等は學校の模範生と云はれ、級でも級長を務めさせて居る子が、免状式の前日あさましい事をして居たのを私が見出して、ほんとに一晚で白髪になると申すのはこんな時であらうと思はれる迄心配致しました。

二四  
この子供は級長といふので、級のお金を〇〇圓計り預けて置いたのです。すると子供心でせうが、リボンよ、手帳よと云つて、後で返さうと思ひ乍ら手許のものを出して遣つたといふので、卒業と云ふ間際、にその金が皆無くなつて居つたのです。明日はこの子供が總代になつて免状を取る筈であるが、そんな品性の子供を級の總代として免状を取らしては、學校に對しても他の子供に對しても、誠に濟まない。さればとてこの事を公にすれば、これから世の中にうやうとする子供の前途を塞いでしまふやうなものである。級長であると申しても、まだ年もゆかない子供にお金を預けた私が一番悪いのであるが、然し公にすれば、私がいくらわびたからとて、この子供の罪は決して世間で消してはくれない。どうしたらよいかと、人に相談する事もならず、獨り胸を痛めて居りました。子供は良心に迫められて青くなつて震へて居るのを見ると、私は八つ裂きにされるよりもつらく思はれました。今此處でこの子供の罪を公にして、自分も共に世間で詫する事は易いが、それで決つてこの子供が改心するものとは思はれない、今の處どうしてもこの子供を生かす方法を考へ

るのが一番である。顯はれたら萬事の咎は自分が着る迄であると決心しました。然し私にはその時〇〇圓はをろか、一文のお金も持つて居ないのです。さればと云つて人に借りればその理由を話さなければならぬので、とうとう有りもしない自分の着物を質入れして、その〇〇圓を拵らへたのです。そしてその子供を呼んで、萬事の罪は私が負つて、今日は許してやるが、今日の自身の苦しみや、私の心配を生涯忘れないで再びこんなあさましい事をしてくれてないとうとう云ひ合せて、とうとうその事は表面事無く済みました。よしこの子供に盗み心があるにせよ、必ず人から後指をさされて後悔する餘地のないよりは、かやうに處置した事がその子の爲めには一番よかつたらうと今でも思はれます。

よく／＼私はこんな悲しい癖を持つた子に縁があると見えて、お耻しい話ですが、宅で貰つた子供の中にも一人そんなのが居りまして、随分その矯正には骨を折りました。御承知の通り宅では子供がいないのですから、近隣の不遇の家々から五人斗り子供を貰つて育て居りました。その中で十三になる男

の子で、大層物がよく出来て、お掃除でもよくすれば、一度云つた事は忘れないですと申す子でした。が、或時この子供に私が手紙を入れさせますと、田舎の事ですから郵便局も懇意なものですから「あなたの手紙に切手がない」と云つて、返へしてよしたのです。それでその子供を呼んで、さつきの切手のお金はどうしたのかと申すと、最中を買つて食べ終つたと申すのです。主人はそれを聞いて、非常に怒つて、そんな子供は學校にやつておけないと申して、机から、本から、すつかり取上げたのです。然しその場は私が詫びて、再びこんなさましい事をしておくれでない。欲しいものは買つて遣るから、決してあさましい心を出してはならないと云ひ聞かせて済みましたのです。さうすると、また數日の後に何てしたか忘れましたが、またあさましい事をしたのです。今度は愈々許されないと云ふので、主人も私も親許へ返して終はうと思つたのです。そしてよく／＼聞いて見ると、家に居つた頃から、さやうな癖を持つて居つた子であるとの事でした。然しまた考へ直して、この子が自分の子であつたら、返へす事も出来ないのではないか、その上に家に返へし

## 明治の女子 第九卷 第二號

たとて、この癖が直るものではない。もと／＼私共も老後の頼りなどと思つてこの子を養つて居るのではないし、只自分の子を育てる代りに世間の一人でもよくするのが自分共の務めであると思つて育てゝ居るのではないか、それならばこの子供が全くこの癖が直らない迄も、自分共の側に居つた爲めに、十度の誤ちが、五度に減り、五度のものが二度に減つたと云ふ丈けても喜ばしい事である。まだ自分共はこの子供に對する愛が足りなかつたのであると思つて、もうどんな事があつても返へさないと思つたのです。そして今度は全くその子供の心の中に入つて、その子供の慾望を、此方が先きに知るといふ程に心掛けたのです。お菓子に慾しうな時には程よくやり、紙鳶が欲しからうとか、鉛筆もどうなつて居るだらうとか、紙が盡きては居なからうとか、極く細く氣を配つて、不知不識の間に、何時もその子の心を此方で支配して居る様にしたのです。さうすると誠に嬉しい事には、段々と癖が直り、この一二年は殆どその癖が消えて参りましたのです。行く先々の保證は出来ない迄も、それを矯めないて置くよりは、確かに爲めになつて居る事と存じます。

私は話を聞きつゝ、天の使の言よりも、豫言するの能よりも、凡ての技藝學術の奥義に達する智識よりも、山を移す程の信仰よりも、わが所有は疎か、我が身を投じて水火に入る勇氣よりも、世界のあらゆるものにも増して大なる、尊さものは愛である、愛である二千年の昔キリストの仰せられた言を繰り返へさずには居られませんでした、誠に愛によりてはぐくまるゝ、汚れし魂も、滅びし人の心も、新らしき生命の芽を萌して、その春秋に花も咲き、實も結んで、神の榮光を頌む事が出来るのであるとつく／＼と感じました。

## 言の消臭

## 萬國學生祈禱日

來二月二十五日は、萬國の學生廣き同情を以て、學生間の問題につき、特に神の前に心を協せて、その解決を求めんが爲めに、祈禱する日と定められたり。左に基督教青年會總幹事モット氏の送られたる趣意書を掲載して、わが會員諸氏も亦この日をその趣意に叶ふやう過されんことを希望す。

## 萬國學生祈禱日趣意書

教育ある男女學生の社會に要求せらるゝ事、現代の如きは蓋し稀なり。彼等は常に國民の思想を導き、理想を示し、輿論を定むるの牛耳を執り、通商貿易の主權を握る等、實際社會と親密なる關係を有つ事、日に月に熾んならんとする勢を呈するに至れり。されば此等有爲の學生に對する我萬國學生基督教青年會事業の任務の重大なるは云ふ迄もなき所にして、彼等をして能く基督の品性に化せる人物たらしめ、進んでは社會に正義を行ふの國民たらしめ、國際間には平和人道を施くの公人たらしむる事を勉めざる可からず。

我萬國學生基督教青年會同盟委員は多年來繼續して成功せる計畫に基づき、特に二月最後の月曜日即ち二十五日を撰んで、萬國學生祈禱日と爲し、世界各國男女の學生相共に神に祈禱を捧げん事を望むもの也。

此日を有効に用ふるが爲め、先づ昨年中神より賜りたる天恩に對し、感謝の事由を摘記し、次に本年中神力の加はらんが爲めの祈禱の次目を掲げて参考に供せんとす。

## 感謝の事由

(一) 昨年中四月土耳其國コンスタンチノール府に開かれたる萬國學生大會は、能く近來諸國の注意を

喚起し、從來離間し居りたる各教派を結合せしめ、共同事業を爲すの端緒を開くに至らしめたり。

(二) 右大會の爲め集れる代表者達は近東にある重要な學生の中心地を訪問したるが爲めに、將來の事業に對する機會はこゝに展開せられたり。加之埃太利の學生運動は新に設けられ、又小亞細亞、及埃及バルカン半島に於ける學生青年會は頗る有望なる發達を見るに至れり。

(三) モット總幹事が端西國訪問をなしたる時、多數の學生は基督を信ずる事を告白するに至れり。尙本同盟は次第に外國より來れる多數の學生に對して一層の責任を感ずるに至れり。

(四) 濠洲に於て外國傳道に對する興味一層深く成り、且つ學生の運動と平信徒の傳道事業の間に同盟が成立し、從て相互間の聲援之より愈々確實なるに至れり。

(五) 一般學生界を通じて廣く社會問題の研究が著しき進歩を現はすに至れり、就中英吉利及亞米利加に於て顯著なるに至れり。

(六) エディ氏が東都亞細亞に巡回旅行を爲したる結果は、千人以上の求道者を興すに至れり。

(七) 青年會指導者の養成に對する一般の注意は以前より増加するに至り、諸種の協議會に於て何れも斯業の中心の人物に在る事を認識するに至れり。尙今年は學生大會の始めて開かれたる以來二十五年目に

相當し、又北米學生有志運動も其齡二十五に達せる事も注目に値する事件也。

### 祈禱の條目

(一) 東洋に於ける新なる諸大學に於ける俗惡なる空氣、南亞米利加及歐大陸の特徵と云ふべき宗教一切の禮典に對する反抗的態度、北亞米利加諸大陸に行はるゝ物質的傾向、及英吉利を初め或る國々の學生の中心地に見るべき一般の冷淡の風尙等は、靈的生命の發達に對し、基督教事業の進捗に對し非常なる妨害をなすものと信ず。

(二) 基督教に對する意見の混沌たる有様は學生を驅つて遂に信仰を求むるに至らしめたるものなり。今や一方に於て根底の動搖せるを思へば、他方には全然不信仰の狀態に在るが如き統一を欠けるの甚しきを見る。此際最も要せらるゝものは、學識あり、真理に對する熱心なる信念あり。基督の感化を十分に受け、思想ある男女に對して基督教の根本真理を傳ふるに足る人物、換言すれば使徒の出でん事之れ也。

(三) 社會各種の運動事業は各大學を通じて其解釋者、或は其豫言者を求めつゝあり、學生青年會は社會的奉仕、社會改良の方法に對し、幾多の機會中より共通路を發見する事を力めざるべからず。

(四) 學生運動を指導する者は年若き有望なる青年時代に在る者より選ばざるべからず、而して指導者たる者は聰明にして祈禱の精神に燃え、基督に奉仕を

爲す爲に人格的感化を用ゐる底の人物たらざるべからず。

萬國學生基督教青年會同盟會委員長  
同 總 幹 事 カール、フリース  
ジョン、アール、モット

### 日本基督教女子青年會

△青山女學院内女子青年會にては、前學期協議の結果、會員各一名につき毎學期一錢宛本部に献金する事となり、先學期分として金壹圓十錢也を送附せられたり。この舉は單に金錢上にて本部の事業を助くるのみならず、支部各會員が本部の記憶を常に新らたにして、神の福音を傳ふべき貴き使命に向つて、絶えず祈禱を寄せらるゝたよりとなるべしと信じ、深く其の舉を感謝す。

△横濱共立女學校青年會に於ては、明治の女子の發展を助けんと趣意により、各會員、切り詰めたる學生の費用の中を更らに節約して、その購讀費を積み、既に毎月十七部宛購買せらるゝ事となり、會長より毎月その金子を纏めて、本部に送附せられつゝあり。其の厚志を深く謝し、併せてその期待に添はんことを希ふ。

△幹事ミス、カア昨年五月、半年を期し病氣靜養の爲め歸國の途に就きたるも、今回事情により辭任の止むを得ざるに至れり、代りとしてミス、レーガン

來朝の筈にて、既に先月下旬本國出發の旨の通知に接したれば、着京の日も遠からざるべし。  
 △總幹事ミス、マゴドナルドは日本語學習の爲め、昨年十二月八日より群馬縣前橋市に趣き、今尙滞在。中、多分二月十日頃歸京せらるべし。

### 東京基督教女子青年會

△十二月二十六日午後二時小石川小日向臺町新渡戸博士邸内に本會主催のクリスマス祝賀會を開く。委員長はミス、ワトネ本會會員並に聖書の組及納戸町、安藤坂兩寄宿舎より凡そ百五十名斗りの來會者あり。小橋三四子氏の今年のクリスマスに殊に意義深く迎へし理由に就きての感話あり、次て各聖書の組、兩寄宿舎のクリスマス頌歌あり、委員諸氏より寄附せられたる茶菓を喫し、隨意遊戲に移りて、五時半頃散會せり。

△一月十七日(水曜)夕宗教委員會を開く。二月二十五日の萬國學生祈禱日(趣意書別項記載)を如何に過すべきかにつき協議あり。當日は隨所に小さき集會を開き、その日を記憶して過すこととし、その日に關する委員長として三谷民子氏を擧ぐ。

以下は前號掲載の筈にて、既に印刷所に廻したるも、紙面の都合にて見合せ、今回掲載の事となりたり。

明治の女子 第九卷 第二號

### ●東京基督教女子青年會

△十二月十四日委員例會を、小室委員長邸に於て開會、三宮委員長を始め、今西、川島、グリツフィン、小畑、コイビイ、テリイ、三谷、ボーフラワア、小室の委員諸氏、マシユウ、ワトニイ兩幹事諸氏の出席ありて、非常なる盛會なりき。開會に先ち三十分間ミス、ボーフラワアの司會にて祈禱あり。定刻三時半より三宮委員長の司會によりて、事務協議に移る。先づ今西寄宿舎委員長、寄宿舎の現狀に就ての報告あり、次て三谷宗教委員長、十一月二十九日開催の宗教委員會に就ての報告あり。現今東京基督教女子青年會の企てになる聖書の組は兩寄宿舎に於けるものを除き十二組あり、百五十名の人々出席しつつありとの報告あり。小室委員より去月中新らだに五名の維持會員、十一名の通常會員入會ありし旨報告あり。各委員熱心に會の自給の方法に就て語り合ひ、次回は二月二日ミス、ボーフラワアの宅にて開會の事に決して閉會。

なほウキルミナ女學校女子青年會、札幌女子青年會、同志社女學校女子青年會十一月中の報告は紙面の都合にて省略いたし候間右あしからずお含みいただき度候

告

廣

院長診察 月、水、木、金、午前  
入院診斷後應需

松田、林、峰間、三副長は目下當院に在勤

## 東洋内科醫院

電話本局

八八八(病院用)  
八九八(私宅用)

東京神田區駿河臺鈴木町二  
御茶水橋附近

## 院長 醫學士 高田 研安

神奈川縣高座郡茅ヶ崎町相海濱  
從停車場半里

電チガサキ二番

## 南湖院

河野、高橋、兩副長は目下當院に在勤

院長診察、土曜日午後、入院、診後應需

### National Committee

Mrs. Hana Ibuka, Chairman  
Dr. Kei Okami, Vice-Chairman  
Miss Tami Mitani, Secretary  
Dr. T. Inouye, Treasurer  
Miss Michi Kawai, Member World's Committee  
And World's Student Christian Federation

|                         |                         |
|-------------------------|-------------------------|
| Resident Members        | Mrs. K. Araki, Osaka    |
| Miss A. B. West         | Miss N. B. Gaines,      |
| Miss Sumi Miyagawa,     | Hiroshima               |
| Miss Hama Hirano        |                         |
| Mrs. Koharu Nakajima    | Mrs. Koito Saiki, Kyoto |
| Miss Uta Suzuki         | Miss M.F. Denton, Kyoto |
| Miss Sarah Ellis        | Miss Wynne-Willson,     |
| Miss Matsu Okonogi.     | Nagoya.                 |
| Mrs. A. M. Fisher       | Miss M. Brownlow,       |
| Non-Resident Members    | Hakodate.               |
| Miss K. Tristram, Osaka | Miss Worthington, Kure. |

Miss A. C. Macdonald, General Secretary  
Miss Margaret L. Matthew, Tokyo Secretary  
Miss G. R. Watoney, Tokyo Secretary  
Headquarters 41 Sanbancho, Kojimachi, Tokyo.  
Miss Matsu Okonogi, Editor.

明治四十五年一月廿八日印刷  
明治四十五年二月一日發行

| 部 數 | 定價(郵稅共) | 海 外 | 廣 告           |
|-----|---------|-----|---------------|
| 一部  | 金五錢     | 金九錢 | 一頁金六圓半段金貳圓    |
| 十二部 | 金五拾錢    | 金壹圓 | 半頁金三圓拾錢一行金貳拾錢 |

編輯 印刷 所  
人 人 所

東京市麹町區三番町四十一番地  
エー、シー、マクドナルド  
東京市神田區美土代町二丁目一番地  
東京市神田區美土代町二丁目一番地  
三島連太郎 舍